

在原行平と伊勢物語の構造

福井貞助

目次

- 一 芹河行幸段の疑問。
- 二 行平業平と津の国物語。
- 三 津の国物語と東国物語。特に後撰集のこと。
- 四 融邸と行平―塩釜段を中心として。
- 五 あやしき藤花段の解釈と芹河行幸段。
- 六 行平関係諸章段と諸本文。
- 七 行平と歎老的形姿。結語。

註

一

1 芹河行幸の段(114段)は定家が注して「或本不可有之云々多本皆載之不可止」或いは「仁和聖日之間粗記臨幸之儀

依此等事又有不審」などと言っている如く古来不審の一段である。

むかし、仁和の帝芹河行に幸し給ひける時、今はさることにげなく思ひけれど、もときにけることなれば、大鷹の鷹飼にて侍はせ給ひける、摺狩衣の袂に書きつけゝる、

翁さび人などがめそ狩衣今日はかりとぞたづもなくなる

おはやけの御気色悪しかりけり。おのが齢を思ひけれど、若からぬ人は聞きおひけりとや。

（以下掲ぐる勢語本文は
福本に據つて示す）

（特記するもの、他は天

仁和の帝は光孝天皇、芹河行幸の事は三代実録に記し止められ、仁和二年十二月十四日の事である。業平はこの六年前元慶四年五月二十八日に卒している事も又明らかである。仁和の帝は業平歿後の即位、何う見ても業平の物語としてふさわしくないものである。更に後撰集には卷十五に

仁和の帝嵯峨の御時の例にて、芹河に行幸し給ひける日 在原行平朝臣

一〇七五 さがの山みゆき絶えにし芹河の千世のふる道跡はありけり

同じ日鷹飼にてかりぎぬのたもとに鶴のかたをぬひてかきつけたりける

一〇七六 翁さび人などがめそ狩衣今日ばかりとぞたづもなくなる（註一）

行幸の又の日なん致仕の表奉りける。

と出ているのであるから、勅撰集を信用すれば実は業平の兄行平の事なのであって、史実としては業平に何等関係のない事であると判明する。初冠段終焉段の配置からも伊勢物語は業平一代を記した物語という常識、又いかに他人の歌や古歌をとりまぜ作りなした作品とはいえ、典拠を案ずればあまりに見えすいた虚事と断ぜられるので、右一段の存在は不審であつた訳である。特定本にのみあるものならいざしらず、多本皆載之、という有様であるから、定家も

納得できぬながら取り上げて、注を記したものであろう。古来の不審箇所は問題とすべきもの多い。ともかくこの一段は明らかに行平に関する事蹟、詠歌を昔ありける男の事とした。つまり行平を暗示するのではなく、全巻貫く、弟である業平を意味する男の事とすりかえているととれるのである。行平は伊勢物語中、ひたかくしにかくされているかというところではない。101段に、「昔、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり……」と堂々と名を出し、又87段にも、「この男のこのかみも衛府督なりけり」とはつきり名は示さぬにしる引き出し、79段では、「昔、氏の中に親王うまれ給へりけり」として末尾後人の注記といわれている部分に、「兄の中納言行平の女の腹なり」という様な文章を記している。更にL段では、断片としてのみ伝えられる章段ではあるが、「昔、在原の行平といふ人みまそかりけり、女のもとに」として女との贈答のみを記し、他の男を出さず、完全に一段の主人公として取り扱われている。これらによつて見る時、伊勢物語中のある章段では相当はつきり行平を取り上げて、主人公の身近な人物として扱っている。それなのに何故114段の如きを生み、逆にL段の如きを生んだのであろうか。問題は114段一段だけのものではない。業平の兄行平は案外この作品の生成に重要な作用をしているのではなからうか。この点を探求点としたい。

二

行平は阿保親王の男、業平の兄である。かつ母を同じくするという。歿年は寛平になるので業平の如く漢文伝を国史に見る事は出来ぬが、散在する諸記事で略歴は知れる、掲ぐれば左の如くである。

弘仁 十年 819 誕生（日本紀略、寛平五年七十六才で薨ずとの記事による）

天長 年間 父親王太宰府より帰京

天長 三年 826 在原朝臣賜姓

從五位下

十二年

侍從

十三年

從五位上左兵衛佐左少將

仁壽三年

正五位下備中權介

四年

備中介

齊衡二年

從四位下因幡守

四年

兼兵部大輔元守如

左馬頭

天安
三年

播磨守

貞觀二年

内匠頭左京大夫

四年

從四位上信濃守

五年

大藏大輔元守如

六年

備前權守左兵衛督格守元

八年

正四位下兼備中守

十二年

参議兼左兵衛督元守如

十四年

藏人頭左衛門督

十五年

太宰權帥從三位

十六年

辭督別當頭

十九年

治部卿帥如元

元慶 三年 879 兼備中守卿如

四年 880 兼近江守卿如 (業平卒)

六年 882 中納言

八年 884 正三位兼民部卿

九年 885 兼按察使卿如
元卿如

仁和 三年 887 致仕

寛平 五年 893 薨 (一代要記では七年八十二才一註2)

一見してその昇進ぶりが知られるが、兄弟中最も栄達したといえる。しかしその誕生と幼時は一家悲運の中にあつた。父阿保親王は嵯峨の御世弘仁二年仲成の乱に座して、十九才にて太宰府に流され、十余年を経て、淳和帝の御世天長初に帰京し得たと伝えられる。行平より六才年下の業平は天長二年の誕生である。親王は十九才より三十過ぎまでの人生の盛りを僻地に過し帰京後の生活も十数年に過ぎなかったとはいえ、もとよりすぐれた人物であつたので、仁明朝など相応に時をえて珍重されたであらうと思われる。行平は中承和年青年期に入り、八年よりの官歴は右に記した如くである。しかるに文徳天皇朝、事によって不運な境遇に置かれたらしい。それは古今集に、

田村の御時に、事に当りて津の国須磨といふところにこもり侍りけるに、宮の中に侍りける人に遣しける

在原行平朝臣

九六二 わくらばにとふ人あらばすまの浦に藻塩たれつゝわぶと答へよ

なる有名な歌が伝えられている事によって知られる。文徳天皇在位は嘉祥三年(850)より、八年間である。行平の官歴表によつてこの事がありうる時期を求めれば、承和十三年(849)―仁寿三年(856)間の六年間の官位停滞期が相当し、文徳天皇

朝に照して、御代がわりの時嘉祥三年(850)より三年の間が行平流離の時と考えるのが妥当である。いかなる事件か何も記し止められては居らぬ。小野篁や阿保親王の如き配流事件とはことなり、私的な、秘すべき情事に係わるものか、歌と共に、臆測は空想を駈って物語を生むであろう。併せ考うべきは弟業平である。業平は嘉祥二年(849)二十五才にして無位より正五位下に叙せられているが、既に注意される如く、三代実録貞観四年(862)の条に授正六位上在原朝臣業平従五位上とあって、この十二三年間、主として文徳朝間に、従五位下より正六位上に一階転落した事がある。これ又事にあたつての次第と見る他はない。そして時期的に行平の事に無関係でもなさそうである。つまり文徳朝御代替りに際して在原家に退転の事があつたのではないか。そして正史記録に何等記されるところないのが、事件の性格を語る一方、伝えられる歌を軸とした歌物語の発生を見るのである。業平に関し同じく退去の事を伝える資料は後撰集巻十七雑三にある次の一首であろう。

身のうれへ侍りける時津の国にまかりてすみ侍りけるに

業平朝臣

二四三 難波津をけふこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみ渡る舟

前掲行平の歌と同じく、悲運にあつて津の国に行った時の作であると伝えている。行平の歌自体は勢語には出ないが業平の歌の方は66段に次の様にあらわれる。

昔、男津の国にしる所ありけるに、兄、弟友だちひきゐて、難波のかたにいきけり。なぎさを見れば、舟どものあるを見て、

なには津をけきこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみ渡る舟

これをあはれがりて、人々かへりにけり。

66段は特に身のうれへによって津の国へ行った、などとは記していない。むしろ逍遙の如くである。67段を見ると、

「昔、男、逍遙しに、思ふどちかいつらねて」とある。現勢語における66、67、68段の一連は69段の前駆的章段で、東下り9段における7、8段に相応し、東下一群が9段の中心に構成されるに對し、こゝは69段伊勢斎宮の段を中心(註4)に構成される形を見うるものである。このような事については且て述べたところでもあるが、中心段に對して附加的成立と考えられるものであり、少くともこの様な構成意識は、69段伊勢行に相応する、摂津和泉への旅行を点出するにあつたのである。しかるに66段の場合、十世紀半後撰の伝えるところでは、その歌は業平の失意流寓の作である。66段はそういう伝えと無関係かあるいは全く無視してつたものであろうか。ところが全くそうとは言えぬ。それはふと洩らされた「兄、弟、友だちひきゐて」の語である。今のべた、7、8、67、68の諸段は同趣の旅行を語った短小章段であるが、これに相當する表現は、「友とする人ひとりふたりして行きけり」(8)、「もとより友とする人ひとりふたりしていきけり」(9)、「思ふどちかいつらねて」(67)「和泉国へいきけり……ある人住吉の浜をよめといふ」(68)というもので、いずれもおぼろげながら同行の人ある事を記しているが、66段にかぎって、兄、弟を出しているのである。それならば業平の津の国住いは、勢語では津の国における行平と結合されて定着しているのである。それは87段にはっきり打ち出されている。

むかし男、津の国菟原の郡葦屋の里に、しるよしして、いきて住みけり。昔の歌に、

葦の屋のなだの塩焼きとまなみつげの小櫛もささず来にけり

とよみけるぞ、この里をよみける。ここをなむ葦屋の灘とはいひける。この男なま宮づかへしければ、それをたよりにて、衛府の佐どもあつまり来にけり。この男のこのかみも衛府の督なりけり。その家の前の海のほとりに遊びありきて、いざこの山のかみにありといふ布引の滝見にのぼらんといひて、のぼりて見るに、その滝ものよりことなり。長さ二十丈、広さ五丈ばかりなる石のおもて、白絹に岩を包めらむやうになむありける。さる滝のかみに、

わらうだの大ききして、さし出でたる石あり。その石のうへに走りかかる水は、小柑子、栗の大ききにてこぼれ落つ。そこなる人に皆滝の歌よます。かの衛府の督まづよむ、

我が世をばけふかあすかと待つかひの涙の滝といづれ高けむ

あるじ次によむ、

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに

とよめりければ、かたへの人笑ふことにやありけん、この歌にめでてやみにけり。かへり来る道遠くて、亡せにし宮内卿もちよしが家の前来るに日暮れぬ。宿りのかたを見やれば、あまのいさり火多く見ゆるに、かのあるじの男よむ、

はるゝ夜の星か河辺の螢かもわがすむかたのあまのたく火か

とよみて家に帰り来ぬ。その夜雨の風吹きて浪いと高し。つとめてその家の女の子ども出でて、浮みるの浪によせられたる拾ひて、家のうちにもて来ぬ。女がたよりその海松を高杯に盛りて、柏をおほひていだしたる、柏に書けり、

わたつみのかざしにさすといはふ藻も君が為には惜しまざりけり

田舎人の歌にては、あまれりや足らずや。

とある。この中、「この男のこのかみも衛府の督なりければ」とあるが、業平の兄行平は貞観六年三月八日左兵衛督となっている。たゞ貞観五年二月左兵衛権佐、三月次侍従、六年三月八日左近権少将となっているから、行平左兵衛督の時は兵衛佐ではない。勿論本段では主人公の男を必ずしも衛府佐当官と解せずともよく、又こういう史実上のつながりを頭において記されたところ、こゝ明かに業平、行平の物語である。その中布引の滝を見て歌をよむ事は古今

集に示されている。卷十七雜上に、

布引の滝にて詠める

在原行平朝臣

九三三 こきちらす滝の白珠拾ひおきて世のうき時の涙にぞかる

布引の滝の下にて、人々集りて歌詠みける時詠める

業平朝臣

九三三 めき乱る人こそあるらし白珠の間なくも散るか袖の狭きに

とあつて、行平、業平が布引の滝の下で詠作した事が知れる。そして「めき乱る」の歌は本段にそのまゝの形で見えているのに引きかえて「こきちらす」の歌は見えず、このかみ衛府督の作は「我が世をば」というような、歎声の深い歌である。しかしながら、この歌は「こきちらす」の歌と全く別趣の歌というわけではない。「我がよをば」の歌は本当は何人の作であるものかはわからぬ。新古今卷十七に一応行平作として見えているが、新古今は勢語が資料となつていたので証とはならぬ。あるいは行平の、同じく布引きの滝にての作かも知れない、とも考えられるが、むしろ真渾の言う様に他書に見られぬから、別人、勢語作者の「こきちらす」の歌になぞらえての変作と見る方が有力のようである。たとえ行平の作であつたにしても、古今集に堂々と出るものゝ外を記したという事は、勢語作者の変作の意識としてうけとれる。いずれにせよ本段は、古今と勢語の一般的な関係から推してもこの古今布引の滝の条をふまえているようである。古今布引の滝の詠作が、果して兄弟同行して成つたものかどうかは知るよしもない。古今集は同趣の歌を類聚する傾向があるし、又同時に一連の作をそのまゝとり入れるからである。だから勢語は事実兄弟が同行して詠作したという他の伝えによつて構えたという根拠が別にない以上、古今集に探つて、この条を成したものであると見てよいであろう。分明しがたい事実ともかくとして、行平、業平兄弟は、津の国布引の滝に同行逍遙する姿は、このように87段において結集せしめられているのである。

行平は文徳朝津の国へ行ったという。業平も身のうれへありて津の国にすんだという。そして共に津の国布引の滝で歌をよむ。これは包括された一つの物語を伝えたゞよわせうものである。たゞ87段自体は津の国物語ではあるが決して行平の「わくらばに」の歌などに伝えられているような文徳朝の事などとは構えていない。むしろ逍遙遊宴を事とする物語である。しかしながら、さりげなく書き流されている底には津の国在住にまつわる、在原兄弟の悲運の伝承が、物語構成者をゆりうごかして行く跡を見ぬわけには行かぬ。布引の滝の、殊に行平の歌の悲哀の調子は深く色どられているのであり、又あるじの男は、このような海浜に、京はなれて住んでいるのである。男の逍遙兄の同行を加えた66段は、実は業平の身のうれしいの歌の歎声でおゝわれている。こういった物語は、さきにもふれるところあった「身をえうなきもの」に思ひなしたという東下り諸段と、微妙なつながりをもって溶融して行くものがあるのである。そこに、隠顕している作意の底流が見出されるように思う。87段から33段への類似の発見と連関の諸徴候への注目によって考察をすゝめて行こう。

三

33段は同じ津の国菟原郡に関する物語である。

むかし、男、津の国菟原の郡にかよひける女、このたび行きては、または来じと思へけるしきなれば、男、

あしべよりみち来るしはのいやましに君に心を思ひますかな

返し、

こもり江に思ふ心をいかでかは舟さす棹のさしてしるべき

田舎人のことにては、よしやあしや。

この段では冒頭その他更に類似点があげられる。末尾書きすてられた一節は正に87段と同類のもので他に例を見ない。この点は真淵なども注意しているが、容易に気づかれるところであろう。この様に二点首尾において87段と類似を見る事は、前よりたどって来た津の国に関する物語の線上にある、という意味においても、全く無意味な偶合と見る事は出来ないであろう。「あしべより」の歌は万葉の類歌あり、明らかにこの段は古歌による構成である。この歌に関し、結合される詞章では78段にいう「津の国菟原の郡蘆屋の里」から33段の「津の国菟原の郡」という場の設定が行われ、78段と同趣の末尾を踏襲するに至る。勢語諸段の性格については、既に述べたところであるが、いくつかの章段について、更に類似した作為ある章段の派生存在は特徴的である。^(註4)

33段において次に見るべきは、この章段の東下り諸段との類似である。この段は宛然、14、15段を想起せしめる。これらの主題は男が田舎にすむ女に通う。しかし二人の間にはしっくりそいつづける事の出来ぬ障りや懸隔がある。そこで別れに際して互に思いに歌詠むのであるが、「といへりければ、よろこぼひて、思ひけらしぞ言ひをりける」(14)「さるさがなきえびす心を見ては、いかゞはせんは」(15)「ゐなか人のことにてはよしやあしや」(33)という評言で示される様に、所詮融合しえぬ女の鄙人ぶりをついて、和歌の理解やよみざまを介して男を都人として浮き上らせているのである。

このように伊勢物語の主人公、昔ありける男の兄が出る章段、それをふまえ続く章段は、実に東下り諸段群に連続融合するものがある点を見出すことが出来る。我々はこゝで、東国諸段群と、津の国諸段との交叉に気づくのである。それは構成方法という点からいえる。たとえば東下り7段と津の国66段とは、共に後撰集に出る歌や詞書とは類似の、又は相通ずるものを持ち、9段と87段とは古今集のそれ、14、15段等と33段とは古歌のそれである。もし古今集に関わるものに、後撰集に関わるもの、古歌に関わるものがつみ重ねられた、という素朴ではあるが、成立時代判

別に撰集を根拠とする点で、ぬき難い一面をもつ見方に従えば猶更、両群はほぼ同様な生長の方向をもっていることが出来、説話の生長と構成の発展とが、全体の上に作用しつゝけた、という事になろう。もとより諸段の成立過程は巖密にいつて現今微細に確と示し切れるものではないが、この様に両群は内容や素材典拠の傾向が軌を一にするところ、相互に無縁に構成されたものではない、と認めてもよいと思われる。東下りの9段は諸本を検すると末尾に、その河渡りすぎて、京に見し、おひて物語して、ことづてやあるといひければ、

みやこ人いかゞと問はば山高みはれぬ雲井にわぶと答へよ

なる文が塗籠本と藤房本とのみに存する。これは古今集巻九の小野貞樹の歌である。池田博士は「この一文のある形の方が原形に近く、今の諸本の形は、後人が古今集などによって整理除去したものではないかとも考えられる」として、格別に根拠は示されぬが、この一文は早くより勢語本文中に存在したと思惟すべきもの、と言及された。^(註5)事の当否はしばらくおくが、とにかく古今集から推される、業平の歌物語の固有のものに附加されたものであって、浮動文である。何故貞樹の歌を附したのであろうか。その疑問に対して、前掲行平の名歌を再掲して「みやこ人」の歌と比較して見よう。

わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつゝわぶと答へよ

この歌との類似を持ち出すのはあえて牽強であろうか。「みやこ人」の歌は、実は「わくらばに」の歌そのまゝ出す事なく、9段により適切なものを、近似によって同趣を附した変形である、とすれば、東下りの構成には成立から伝流間にある、行平の須磨流浪がこのように影を宿しているのである、ということになる。

伊勢物語諸段の中、男が他に旅をしたり、住んだりする物語は、すべて哀調歎声に掩われるというわけではない。それは東下り、津の国物語の一系中に見出される特徴である。しかし次の一段、59段の場合は、同じく業平の憂愁の歌を

とっているだけで、無縁視できぬ姿をあらわしている。

昔、男、京をいかゞ思ひけん、東山にすまん思ひ入りて

すみわびぬ今はかぎりとし山里に身をかくすべき宿もとめてん

かくて、ものいたくやみて、死にいたりたりければ、面に水そゝきなどして、いきいでて、

わが上につゆぞおくなる天の河とわたる舟のかいのしづくか

となんいひて、いき出でたりける。

第一歌は、第四句「つまきこるべき」として後撰集卷十五雑一に業平作として出で、第二歌は古今集卷十七雑上に読入しらず歌として出るものである。第一歌は後撰集に「世の中を思ひうじてはべりけるころ」という詞書があるのみで津の国とも東国とも伝えられては居らぬ。とにかく、世の中を思いうじた頃の述懐として伝えられた事がわかる。だから勢語でも、「京をいかゞ思ひけん」とあるが、東国とも津の国とも別した東山を持ち出したのは、歌に「山里」にこもらんとある故であらう。第二歌は天理図書館蔵伝為家筆本に卷末に抜出して載せてあるから、これを欠く本もあった事になる。第一歌が後撰に見える業平の歌であるだけに、59段の二歌含有は、附加成長と見られるふしもなくはない。第一歌より第二歌への転変は、「今はかぎり」とから、「死に入りた」る状態を叙さしめ、終焉段が別個に存するところから、古今集歌によって蘇生を計ったわけである。塗籠本ではこの段を終焉段と合わせてしまい、再び男の最後と構えてあるのである。このように59段は、業平の「すみわびぬ」の歌から発展構成される跡を見うるのであるが、世を思いうんずる事が、直ちに「京をいかゞ思ひけん」という、東下り諸段の「京にありわびて」「京やすみうかりけん」と同じ表現をとっているのであって、そこにこの男の憂鬱が離京の思いと明瞭拡大化されて、京社交圈よりの離脱と、やゝ諧謔味を加えつゝも、つゞいて窮命が語られているのである。したがって、「すみわびぬ」

の歌をもとして、業平流離といった、東下りなどに連なる視点からの作為があるので、悲運の実体は何等はつきりと示されないにも拘らず、そういうものを負うた業平の形姿は彼の類縁と伴って、いよいよたしかに刻みこまれて行く。そこに形成者を見出す事が出来るが、更にこういう究明にあつて59段の軸となつた歌の性質も、この章段が津国物語から東国物語へとすゝめた考察の一環として考慮される点である。

以上の諸章段に關し、後撰集との關係には注目すべきものがある。後撰と勢語の共通歌は、業平作と示されるものその他を合せ十一首であるが、両者の關係には不明瞭な点が多い。後撰集の業平歌四首が勢語に存しないのは、古今と勢語の場合とは異り、まず疑問をいだかせるものであり、古今勢語の場合とは異つた、考え方や興味をおこさせるのである。さて右十一首について、池田博士は、後撰集の詞書に注意して、比較的伊勢物語に似たる詞書を有する場合(一)と詞書なきか或はあるにしても極めて簡單なる場合(二)とに分類されたが、^(註8)今この前者を見ると、(一)内は相当勢語章段)

(7段) 卷19 東へ罷りけるに、すぎぬる方恋しく覚えける程に、川を渡りけるに浪の立ちけるをみて 業平朝臣
いとどしく過ぎゆく方の恋しきに羨ましくもかへる浪かな

卷15 世の中を思ひうじて侍りける頃 業平朝臣

(59段) すみわびぬ今は限りと山里につま木こるべき宿もとめてむ

卷17 身のうれへ侍りける時、津の国にまかりてすみはじめけるに 業平朝臣

難波津をけふこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみ渡る舟

卷15 同じ日鷹飼にてかりぎぬの袂に鶴のかたをぬひてかきつけたりける (行平)

翁さび人なとがめそ狩衣今日ばかりとぞたづもなくなる

行幸の又の日なん致仕の表奉りける

の四首であり、ことごとく業平又は行平の歌である。他の八首は、45段にある巻三の「ゆく蜚雲のうへまでいぬべくは秋風ふくとかりにつげこせ」のみ業平の歌で、他は読人しらず四首、上野峰雄一首、在原元方一首である。又勢語に見えぬ業平の歌四首中二首は恋歌といふべきもの、他は、

巻16 思ふ心ありて前太政大臣によせて侍りける

頼まれぬうき世の中をなげきつゝ日陰におふる身をいかにせむ

巻17 大井なる所にて、人々酒たうべけるついでに

大井川うかべる船のかぶり火にをぐらの山も名のみなりけり

という作である。これらを案ずるに、(一)の分類に属する後撰四首は、すべてさきに述べてきた行平関係、京を流離の章段にほゞ同趣で見出されるといえる。そして又、後撰に見える業平の歌というのも、少々の恋の贈答歌を除いてはほとんど身をなげきわぶといったものである、という事も出来よう。これは何を物語るであろうか。少くとも後撰集の勢語への関わり方は、業平の流離哀歎という面において、明瞭な傾向を見る事が出来るのであって、(一)の分類に関する限り、勢語が後撰に拠ったという関係を思わせるものが多い。それは行平の歌からいえる。行平の歌は古今に春一首、離別歌一首、布引滝一首、須磨詠一の計四首であるが、後撰では前記芹河行幸二首、融との唱和一首、巻十一恋一首の四首である。^(註9)融との詠とは、巻十五雜一において、巻頭芹河二首につゞき、贈太政大臣と友則との唱和、中興、嵯峨後の歌等四首をへて、次に

家に行平朝臣まうできたりけるに月の面白かりける夜さけなどたうべてまかりたゝむとしけるほどに

河原左大臣

一〇八一　てる月を正木の綱によりかけてあかずわかるゝ人をつながん

かへし

行平朝臣

一〇八二　かぎりなき思ひのつなのなくばこそ正木のかつらよりもなやまめ

とある。この歌は俊頼髓脳に「これは惟喬親王の月にあそびけるが、月とゝもにいりにければ、業平の中将のよめる歌なり」とあるが、他に資料あつての事ならば興味深いが、82段惟喬親王と馬頭物語の歌の誤認と見れば、それほど通うものがあるわけである。つまり82段末尾の、

かの馬頭のよめる、

あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れずもあらなん

親王にかはり奉りて、紀有常、

おしなべて峰もたひらになりなん山の端なくば月もいらじを

であるが、前の歌は古今に勢語と同じ意味の詞書があつて、業平の歌であるが、後の歌は後撰集に上野峰雄の「月夜にかれこれしてよんだ歌として出るものである。明らかに勢語作者がとり合わせた作為であるが、この構成は右の融行平の唱和にヒントをえているのではなからうか。後撰によれば融、行平に親交ありし事が知られるが、82段では業平たる馬頭と、親しい有常が惟喬の代作をするとなつてゐるのである。そして行平が訪れあそんでいる融邸の事は、惟喬親王諸段群の近くに位置している、行平や業平類縁に関わる一群中の81段に、遊宴の場として、業平らしき男を登場させてゐるのであり、更に後撰では、右の融行平の贈答に続く歌が、59段を形成してゐる、業平の一八〇三「すみわびぬ」の歌なのである。こういった諸点があげられる上に、後撰集に見える業平、行平の歌は、業平の少々の恋歌などの外、勢語に存しない「頼まれぬ」や「大井川」の歌にしても、そのまゝの形で勢語に見出せぬにしろ、哀訴や遊宴

を通して、少くとも、後撰集中に求めてこそ、構成展開されただろうと思われる要素をもった諸物語を、勢語の中に把える事が出来る。古今集の場合と異り、後撰集が勢語から材をあおいだとする見方の有力な障害は、後撰集に見え業平の歌のすべてが勢語に存しない、という事であろう。それは勢語が業平の物語で、業平の歌に当然すべて収めて行く筈だという前提に立っている。そういう観点からすれば芹河行幸の段はどうであらうか。むしろ逆に、こういう章段が成立しているところに注目すれば、勢語形成は業平歌の類聚を事とするという方法をこえたものをもっているのである。それは、行平的なものへの注視から究明して行くべきものである。

勢語と後撰集が、直接の関係はなく、共通する歌が、別個の第三の仮定文献——たとえば業平集——に本有し別々に収載された、という説は、一応顧慮して置く必要はある。たゞしその仮定文献とはあくまでも仮定されるもので、現在の物的証拠に乏しく、それだけにこれを強調するのは現存資料後撰、勢語のみから来る矛盾を消去しようという便利さをもった説である事に注意しなくてはならぬ。この点勢語後撰集間に複雑な相互の取材関係を考える説も同断である。ところで仮りに仮定文献より勢語後撰集が文献的に別々に歌をとったとすると、まず歌についての所伝は後撰の方の詞書に多く見るところがあろう。逆とすれば、勢語より後撰が、収載した場合に近くなり、後撰選者が、勢語なり業平集なりに解釈を加えて、集にある様な傾向の一連をとり上げた事になってしまうから、そこに選者の解釈が露呈されるわけである。だから仮定文献にある業平歌の所伝が、後撰により正しく伝わっているとする場合では、後撰勢語の詞書と詞章を比較する事によって勢語の潤色作為を見る事が出来る、といえる。そしてその場合後撰の収載した業平の歌とは、古今の場合に比べては勿論、前述の一傾向の色彩が強くうけとれる訳であるから、その時代の業平に対する評価や観念に特色を見る事が出来、いずれにせよ、それらはやはり勢語の形成と無関係ではなからうと思うのである。したがって結論的に言えば、勢語後撰の関係には、後撰集の業平の歌を中心として、後撰から勢語へと見る

べきふし多く、そこに業平行平らについて抱かれて行った作為の方向を探りうるし、更に慎重に複雑な場合を思つても、後撰にある業平や行平の歌、それに対応してとりあげられる勢語の歌の性質は、勢語中に業平行平らをめぐつてももし出される愁歎のひびきを加えゆくべき、当時の人々の話柄を反映しているという事が出来る。

四

81段につき注目される点はまず、作意の底流に行平が介在する章段群中に位置していることである。そしてさきに見た、行平関係章段の発展が東下り諸段と溶融する、という見方に関連して、東下りについての記述を持ち、更に右の33、59、87段などを通ずる、作者の、説話中の歌やよみ手についての、謙退又は卑視的な態度を見うるのではないかということである。この物語本文を次に示す。

昔、左のおほいまうちぎみいまそかりけり。賀茂河のほとりに、六条わたりに、家をいとおもしろく造りて住み給ひけり。神無月のつごもりがた、菊の花うつろひさかりなるに、紅葉のちぐさに見ゆる折、親王たちおはしまさせ、夜ひと夜酒飲みし遊びて、夜あけもて行くほどに、この殿のおもしろきをほむる歌よむ。そこにありけるかたる翁、板敷のしたにはひありきて、人にみなよませはててよめる、

塩釜にいつか来にけむ朝なぎに釣する舟はこゝに寄らなん

となんよみけるは。陸奥の国にいきたりけるに、あやしきおもしろき所々多かりけり。わがみかど六十余国のうち、塩釜といふ所に似たるところ無かりけり。さればなむ、かの翁さらにここをめでて、塩釜にいつか来にけむとよめりける。

左大臣は源融、六条の邸宅河原院に塩釜の景を模した園池を設けた事は、古今集をはじめ江談抄今昔物語以下誇張さ

れて喧伝され著名である。さきに掲げた後撰卷十五の贈答によればこの融と行平との交遊があつた事がわかる。風流大臣、嵯峨皇子たる融と在原家の人々との交際は行平の歌を通して推量されるのであるが、勢語では業平を目した男が融邸に参つて歌を献じている、という物語となつてゐるのである。この物語は實際にあつた事であるかはわからぬ。又塩釜にの歌は業平の作かも知れぬと証とするものもない。純禎の勢語通では古今集の貫之の河原院を訪うての作、君まさでけぶり絶えにし塩がまのうらさびしくも見えわたるかな

を業平の塩釜の歌にもとづいて作りしものといつてゐるが、論証というほどのものはない。こゝで本章段の問題となるのは、「陸奥国にいきたりけるに……」以下の詞である。これは、この男が陸奥国に行った時に、という風に解され、「中将も奥州へ下りてみたるに誠にならびなく思ひて……」(愚見抄)「此より作者のいへる也業平の行きたるなり」(臆断)「こは彼翁のはやき時に陸奥に行て見たりし故にかくはよみたりといへる也」(古意)などの説があるが、「みちの国にいきたりとは業平に限らず誰人にも如此点思へるなるべし、殊に此浦の名誉なり。こゝも筆者の詞なるべきか」(闕疑抄)の如く異なる説もあり、殊に新釈で「みちの国にいきたりけるは此物がたりのつくりぬしはいきたるや。臆断古意などにかの翁のいきたるやうにこゝろえてとかれたるはむげに文を見しられぬしわざなり」と反駁し、この文記者に関する事だとした。新釈の説は以降流行したものが、果して妥当であらうか。勢語の文簡に過ぎて説を生ずるはこゝのみではない。陸奥の以下の文が、本文と別して附記的な性質をもつものであるという事は誰しも感じるところである。それ故筆者の詞とか記者の文とか説明されるのであるが、新釈の説はこの記者という見方を強調した説である。しかし陸奥へ行つたとは記者が行つたと解そうと、男が行つたと見ようと、この記述者は勢語の東下りを意識していた事は間違いない。高宮環中の伊勢物語審註には「みちの国にいきたりけるにといふを、なりひらにかぎらず、誰人にて、かくのごとくおもへるなるべしとあれども、是は正しく、その国にいきわたら

れしを、前に書きたる業平の事のあれば、此歌の詞を立んとて、それなればこそかやうの趣向を思ひ附し、外の人の其所へ行て見ざる事にては、よまれぬこと葉ぞとしらせたる也。」とあるが、業平東下りの実否はともかく、東下りを念頭においての記述と見るは自然である。近く窪田空穂氏は評釈で、業平が自歌自註をした形の一段と見て、「陸奥の国に行きたりけるに」は、これは既に東下りをして、陸奥国まで行っていることにしてある業平以外の者にはいえないことである。仮りにこれを、このことを叙している物語作者のことにすると、甚だしく突飛で、不自然なものとなり、「さればなむ彼の翁」の思い出と折り合はぬものとなる。」と説くが興ある説であらう。又、「陸奥国……」以下所謂後人の註記補入として、前部の成立よりひどくへだたつて後の註釈家によって附記された、と見るのはいわれのない事であり、現存本文面からも証を求めまい。

右の部分諸本を検するに大異小異様々である。塗籠本では「……さればなむかのをきなもめててしかはよめるなり。しほ□まうきしまのかたをつくれるなり。」となつており他本とかなり異なる。これは泉州本では註としてこの段末に附された「河原院事なりしほかまうきしまとつくれたりけるとなん」とあるものと関係がある様であり、あるいは一部単なる註記の混入したものを伝える伝本もあるらしいが、総じてこの部分特立させて考えて見ても本文の共有と異文は、相当の古さを伝えるものといつてよい。さて以上の如く諸解あるも、かの翁が既に東国を実見した事を頭に置いた記述ぶりである事は間違いない。「さればなむ」又は「されば」などという接合を見ても、「その様にすばらしい所だから、（その地を見知っている）かの翁も、この邸の景をはめて、この様に詠んだのだ」という事になる。単に、「翁も知つてこの通り、世に塩釜は絶景なりと伝えてるので、という意味であれば、かくくだぐだしい説明文は書かれるまでもあるまい。

81段に出る河原左大臣源融は、さきに述べた如く行平と交際があつた。融邸の風雅さはこの段に伝えられるだけで

なく、源能有が融薨後彼邸の傍を通り、その未だしき紅葉を見て詠唱ありし事は、古今集卷十六の詞書によって知れるが、その風雅な邸における遊宴の追憶として、「うちつけに寂しくもあるか紅葉葉もぬしなきやどは色なかりけり」の歌はよく理解される。又同じ巻に詞書して貫之がやはり融薨後かの家に参上して、塩釜という所をさまでつくつてあるのを見てよんだ歌が出ているが、「君まさだけぶり絶えにし塩釜のうらさびしくも見えわたるかな」といずれも豪奢風流を思わせる、河原院をめぐる王族歌人たちの歓会の哀惜である。塩釜の景を模して海水を入れ塩焼く云々は後代説話の誇張多々であろうが、主人の嗜好から発した魅惑的な奥州歌枕の庭園造りは、訪れる歌よみ達をよろこばせ酔わせるものであつたろう。融も古今後撰両集に四首を示す歌人である。和歌興隆期の貴紳たちの教養と興味に滲透して行く雅情は、このような交会の場合において育ち行くものであつた。兄行平と同じく歌人として名の出た業平が、而も東国をよみ入れた数々の佳調名歌と共に、實際河原院に出入し、或は近傍にあるとすれば、こゝには空想にとむ詩的世界の、縮約された人工美と共に蕩揺する気分が満ちたに相違ない。若い貫之などは敏感にその空気を身につけたろうし、又融の「みちのくのしのぶ文字摺たれゆへに乱れそめにし我ならなくに」という歌などと共に、伝承の中に業平と融とは溶融して行つたにちがいない。81段はこういう中から生れたのである。融邸はこの説話から取除く事のできぬ、中枢たる歌としかと結びついたものである。

81段の歌よむ男は、東下り人として固定化した意識の下で記述されているのであるから、筆者は脳中に、身を思いわびて放浪する業平を思いうかべていたわけである。而もこの融邸という現実的な場の提示は、在原氏の男に關し行平もふくめて、その境遇をふまえての作意がうごいた、と見てとらなくてはならぬ。融邸には「親王たちおはしませせて」遊宴が行われたのであり、それが史実であるとしても、物語構成上は、行平に關係深い、80段氏の中に親王誕生81段藤花を折つて奉る哀訴媚態、につゞいて、このような宮廷社交生活圏という現実的な面において、彼等在原氏の

悲運の面影の一斑を暗に語るものなのであり、こうした気分や意識のあらわれを、この一段には見る事が出来る。したがって87段行平を出す章段の関連段として扱えられる諸段が、東国物語と接し合うという事実には比すれば、81段も東下りを出しつゝ行平に関わりゆくものをひそめていると、いう点に相通うものが貫かれていると見る事が出来る。それは又、この段に「かたる翁、板敷の下にはひありきて」と自卑の如き筆が見出されるが、筆者自らの業平めかした記述ぶりによると見る以上に、この種謙退の表現は、右87、33、59段等にも共通してうかがえるのであって、この点からも連関をたしかめて行く事が出来る。

勢語中、明らかに歌やよみ人について謙退や卑視の辞の見えるのは、實在人名を出したり、史実めいた記事を見せる章段に特に見うけられる。それは39段、源至について、「天の下の色好みの歌にては、なほぞありける」、77段、右馬頭なりける翁の歌について「いま見ればよくもあらざりけり……」、103段深草帝に仕うまつる男の歌について、「さる歌のきたなげさよ」——塗籠本にはこの文欠く——などであり、右今のべた81段について、87段の「ゐなか人の歌にてはあまれりや足らずや」「かたへの人笑ふことにやありけん——尤もこれは愚見抄、直解などほめたのだとする説もあるが、臆断にいう卑下の詞なりの意に従うべきであろう。塗籠本ではこの下『このうたをよみてやみけり』とあるが、新釈は『この歌をかたへの人わらふ事にやありけんさて興さめたりとてよまずなりしならんと云う意也』として塗籠本の本文をよしとしている^(註10)」、それに在原行平の名を出す101段にあるじ行平のはらかなる男を「もとより歌のことは知らざりけれど」と言っている。こういった類の章段に対して、87段に関連して考察した単に男女の物語である。33段の「ゐなか人のことにてはよしやあしや」があげられ、又更に京をすみうく思う男が、人事不省となり、水ふきかけられて蘇生するという59段の、後撰集雑一の業平歌に古今読人しらず歌をそえての構成では、男は卑小化し、歌は歎賞のおもゝちで、あるいは情趣をこめてとりあげられる、というより、むしろ誇張した滑稽の感を

催さしめる事から卑視的なものを認めうるのである。

これについては見るべき章段がある。実は102段も男について「歌はよまざりけれど」と謙辞をもつのであるが、この段高貴な女が尼になって、「世の中を思ひうんじて、京にもあらず、はるかなる山に住んでいたところに歌をよんでやるのである。102段は、101 102 103と並んで謙退卑下の辞の出る章段がつゞくところに位置するのであるが、実名や史実を出す段という訳ではない。たゞ末尾多くの本に「斎宮の宮なり」と記すが、真名本等欠くものがある。これは69段伊勢斎宮段末に「斎宮は惟喬の親王の妹」と註めて記され、段初の「親の言なればねんごろにいたはりけり」などに照応させて、説明しており、事実惟喬母は紀静子であるところから、斎宮は業平の親族とあらわしているのである。102段の末文はこの69段に拠るものである事明らかである。そして102段の、「もと親族なりければ」とあるのは、業平の親族と目した点で、彼一族の周辺を語る段ととれよう。それは又16段世かはりてまずしき紀有常の名を出して、その妻の床はなれ尼になる物語に連なっている。ともかく102段は、59段の表現と似たものを感じさせつゝ、右諸段と相通ずる点を思わしめるものがある。

以上の33 39 59 77 81 87 101 102 103の諸段には、似たような筆者の態度を見うるのであって、多く実名や史実的なものを出すものであり、中に一見そうでない章段であっても、行平や業平縁辺を匂わせたりその発展の如く考察される要素を濃厚に有するところから、これらにおいて指向し、あるいはつみ重ねられたところがうかがえると思う。もとより勢語には、既存の詞句や構成を模してつみ上げて行く作為を見うるのであって、右の中にもその種の結果は存すると思う。だが中心的なものをつきつめて行くと、やはり行平の関与する章段あたりにいちじるしく焦点がしぼられて来るようである。それは謙退卑視といっても詞句のみではなく、一段の物語として語られている全体の中に見出されるものがあるのである。そして右にふれた、行平の名をはっきりと示している101段は重要である。

101段は次の如くである。

昔、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。その人の家によき酒ありと聞きて、うへにありける左中弁藤原の良近といふをなむ、まらうどぎねにて、その日はあるじまうけしたりける。なさけある人にて、瓶に花をさせり。その花の中にあやしき藤の花ありけり。花のしなひ三尺六寸ばかりなむありける。それを題にてよむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじし給ふと聞きて来りければ、とらへてよませける。もとより歌のことは知らざりければ、すまひけれど、しひてよませければかくな

さく花のしたにかくる人多みありしにまさる藤のかげかも

などかくしもよむといひければ、おほきおとどの栄花の盛りにみまそかりて、藤氏のことにも思ひてよめるとなんいひける。皆人そしらずなりにけり。

しかるべき人物の邸宅に人々参集して宴を張る、そこにある男が出て、邸内の景物につき歌を詠む、そしてその歌について説明が附記される。物語中の男には、「かたる翁」あるいは「もとより歌のことは知らざりければ」といふ様に卑下の辞がある。これらはこの章段が81段に近似する諸点である。同程度の類似は他段に求めえず、二段とりたてて相対されるといえる。而して81段は融邸と業平と目される男、101段は行平邸と業平と目される男が登場する。冒頭「昔左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。」は81段「昔左のおほいまうちぎみいまそかりけり」と同形式で、かつ77、78、82、97段等、実人名をあらわし史実めいた記述をもつ諸段とも同じものであり、時代を明示し、一段の主たる人を他に提示する如くであるが、個々別々の説話とはならず、実は主人公男をよりよく動かしている形式であ

る。同じ行平を出しながら、101段は87段と異つて、何といきなりこの人物を押し出している事であらうか。こゝでは歌の興味は夢幻空想の恋の世界においてではなく、在京諸貴顕のゴシップ中に求められているのを見る事が出来る。

101段の人物は官職が明記されている。これはこの物語の取材した時代を示す如くであるが、臆断古意等が史実に拠つて見た時、正確な史実とは見られぬ事が判明した。周知の事ではあるが、文中良近の左中弁は貞観十六年、行平左兵衛督は同十四年までである。又太政大臣良房は貞観十四年九月に薨じている。この段に限らずこの種の史実との矛盾は勢語の常である。しかし101段に関しこれが意識的な作為とは必ずしもいいきれぬ。良近は貞観十七年八月十五日左中弁より神祇伯になっているが、九月九日没しているから、弁官は五年以来最も官人としての彼を記憶せしめるものと考えられれば、その最上を以て記し、行平の場合は87段に出るところと関連せしめたものであらう。行平左兵衛督の時は従四位下より正四位上の間、良近左中弁は正五位下より従四位下の間である。同位程度の者の交遊と設定したとすれば又別であらうが、一々史実を考証した上での虚構というには当るまい。さて101段より想起させられるのは79段であり、又それに続く80段である。

(79) 昔、氏の中に親王うまれ給へりけり。御産屋に入々歌よみけり。御祖父がたなりける翁のよめる、

わが門に千尋ある影をうゑつれば夏冬たれかかくれざるべき

これは貞数の親王、時の人、中將の子となんいひける。兄の中納言行平の女の腹なり。

(80) 昔、おとろへたる家に藤の花植ゑたる人ありけり。三月のつごもりに、その日雨そほふるに、人のもとへ折りて奉らすとてよめる、

ぬれつゝぞしひて折りつる年の内に春はいくかもあらじと思へば

そして前述塩釜の段、「昔、左のおほいまうちきみいまそかりけり」の81段はこの後につゞいてるのであり、この

79、80、81の連続配列は現存諸本皆同様である。

79段は、氏といい祖父方という。末尾注記めいた一文では貞数親王と顯わしているが、まぎれない事である。業平の兄行平の女文字は清和女御となり、貞観十九年貞数親王を生んだ。明らかにこの事を歌物語化したものである。貞観の中期以降、行平の官歴を見ても、業平のそれに照しても、嘗ての停滯不遇の時代よりは、在原一門はかなり賑やかな空気につゝまれていたらしい事は容易に想像できる。四十代から五十にかけての業平は、若年の逸事と共に歌人として注意をひいて来たであろうし、温厚な実務にたけた一門の代表長者行平を中心として交際も盛であつたと思われる。一門の中に皇子が誕生した。これは藤氏が一方にひかえている世の中で、極度な榮華への希求でなくとも、明朗さをもたらずのものであつたろう。祝賀の歌としての形式をふんでいるが、「わが門に」の歌はこの皇子誕生により一門庇護を蒙るよろこびのあらわれたものである。ところが附記があつて時人中将業平の子というところがある。この文章は真名本のあるものに欠けているが、102段末部などと異り真名本でも有する本もあり、又塗籠本では「行平中納言のむすめのはらなる清和の親王也時人の中將のことなむいひける」と他本とはゞ同義であるが異なる文章で記されているところを見ても、勿論中世期注釈家の追記などではない。註記めいた附記ではあるが81段、あるいは6段芥川の物語の所謂注記とも合じ様に、実記めいた筆つきを思つても、同性質のやはり古くから本文として伝わったものと見るべきである。さて79段の附記によれば、在原氏のよろこびを意外な秘事で暗く伝えている。それは時人のそしり、ととれる。もとより好色人業平を示すものとも考えられ、その場合81段に見られる様な固定化され行く、業平観を把える事も出来ようが、わざわざこの祝賀の歌に、時人が云々と噂する、と本文化して伝えているのは、やはりこのようなよろこびがあり乍らも、決して隆盛とはいえぬ在原氏の翳も語つているといえるのであつて、附記的文章に強く印象づけられて全体を見れば、表面喜ばしい賀歌を詠ずる男、業平を、やはりうれしや苦しみにとざされた姿となつて来

(註11) ざるをえまい。そして別様に見れば歌も謎めいて来るともとれる。歌にも又いろ／＼と揣摩臆測がつきまとうのである。こういった宮廷世界における勢力という背景をもった祝賀の歌を中心とする物語として、再び101段を見るがよい。

この物語は行平邸に良近を主客として宴が開かれることからじまる。行平の許には良酒あり、別に三代実録に伝えるところ良近は酔うて大力を示したというから上戸と伝えあるべく、まずは適う記事であらう。集会は一入のみではなく諸人参会と見るべき文章である。行平の饗応には奇異な藤花があったが、勢語記者の、情ある人と行平を評するのは、古今真名序に、「雖風流如野宰相輕(雅一本)情在納言。」と評しているのや、のこされている歌を併せ考えても、彼は仲々の情趣を解する人としての伝えがあった事を知りうる。後代業平のみ誇大に喧伝されたが、兄行平も世に名だたる雅情の主であったのである。

さて、まずこの段は87段布引の滝の段に連るものと思われる。というのは左兵衛督の称のみではなく、第業平を交え同僚同好の遊宴という点もあり、その点では817両段は同趣向である。次にこの段では左大臣邸に「親王たちおはしまさせて」とある。これは79段に、在原家皇子誕生をのべているのとつながりがあるようだ。82段以下には諸本惟喬親王物語が続いているから、この辺の構成は各々断絶したものではない。79段と81段との間、80段は、衰えた家に藤花を植えた人が、人の許に歌をよみやる条で、これ又101段の藤の花と無縁ではなさそうである。「ぬれつゝぞ」の歌は古今集に明らかに業平の歌として出るものである。「やよひのつごもりの日雨の降りけるにふぢの花を折りて人につかはしける」との詞書がある。勢語の文と同じようだが、勢語の方では「おとろへたる家に」といい、奉らすという。先学の指摘される如く単なる贈歌ではない。藤の花で象徴される権勢家藤氏への哀訴である。前に掲げた後撰集卷十六雑二の、「思ふ心ありて前太政大臣によせて侍りける」の詞書ある業平の「頼まれぬ憂世の中を歎きつゝ

日蔭におふる身をいかにせむ」は勢語に入っておらず、愁訴の歌として意外な感に打たれるものであるが、この趣に符節を合するものであり、80段の生じたのも故なしとしない。79段の「千ひろの影」と、80段の藤花と不遇哀願、81段の遊宴風雅、これらはことごとく101段に聚り来っているを見ることが出来る。又これら四段につながる糸は在原家類縁のものである。

良近は行平とどういう関係にあったものであろうか。詳しくは知りえぬが、まず、三代実録貞観五年三月廿八日、従五位上の業平や有常と共に、従五位下良近は次侍従に任ぜられている。同職の交わりはあったものであろう。次に行平はその女文字を清和女御として入内させているが、良近も同じくその女が清和妃となっている。三代実録貞観十五年四月二十一日の条、是日定親王源氏四人とあって、諸皇子とその母の掲げられた中に、「皇子貞平、母藤原氏、右中井良近之女」とあり、その女は既に貞平親王を生んでいるのである。一方、又、「皇女包子、母在原氏、参議左衛門督行平之女」とあるから、貞数誕生は貞観十九年でこの後の事であるが、既に行平女は入内していた事も知れる。こういった関係一応両家の関心の持ち合い方をうかがえる点ではある。こうして行平、業平と良近は官職においては行平が上であったか、雲上人としてこの交わり以上に、勢語に伝えられるところが全く無根の事でないと考えれば、和歌風流の道において交際があったものではなからうか。良近の漢文伝は、「容議可観、風望清美、雖無学以政理見推」とある。「風儀清美、無學術」とは直ちに同じく三代実録の業平伝の「体貌閑麗、略無才学」を想起させる。又「以政理見推」とは実務家として才のあった行平を想いおこさせる。才学の徒たらずとも他に秀れたる才あるというは、やはり同質的な性向や嗜好の通ずるものあるを推察することが出来よう。

行平邸の遊宴や風雅な行事というのは、仁和年間に行はれた在民部卿家歌合という現存最古の歌合の主催者としての彼の身边からも十分推し及ぼしうる。101段の饗宴は藤原良近という正客のため、在原行平邸には藤花、それも人目

をおどろかす奇異な花が飾られ、一座の詠唱がはじまる。藤花が題であるが、勿論藤原の主客への敬意がこめられる。そこへ行平の弟業平が来て、一座のすゝめで歌をよむ。「もとより歌のことは知らざりければ」なる謙退の弁は、無論高名の歌人としての業平を頭に置いている。彼の作、「咲く花に」の歌は一座のそしりを買わんとするが、よみ手は巧に言訳をしてよき様な解釈を披露する、という事で納まりがつくのであるが、これをめぐって当初の一座のうけとり方としての歌の意味が主に問題となる。近時今井源衛氏の新解もあらわれ、注目をひいた。すなわちこの歌を諷刺の歌とり、「諷刺の対象は藤氏であり、『下にかくる人多み』には藤氏一門のかげに次々と姿を消し去ってゆく他の弱小氏族の運命をこめているにちがいない。その危険な諷刺をそのまま見抜いた同席者が、こともあろうに良近の面前でと、色をなすと、しゃあしゃあといふ言遁れをして、一同の口を閉じさせてしまった。」との説である。^(註13)これについて松尾博士は傾聴されつゝも、「諷刺とは少くとも教養ある読者の大部分に一読感得せしめうべき体のものでなければ意義はとぼしい」としてこの場合は、「諷刺といはうよりは、表に藤氏に媚を送り、裏にひそかに自嘲し自慰する心理の表出であるのではあるまいか。」とのべられた。^(註12)又片桐氏は他章段との関連を考えて、98段を後撰巻十六の歌における良房に対する態度より、「『咲く花』を太政大臣良房、『下にかくる人』を良近と見るべきではなからうか。いずれにしても、藤原氏の極盛期におもねる歌、媚の表現以外の何物でもない」と説かれた。^(註14)うけとり方としての「などかくのもよむ」という意味は問題であるが、松尾博士は解きにくいとし、「まらうどぎねをつかまえて、『下にかくるる』など弱々しい者と表現するなんて下手なうただが、なんだってこんなことをよんだのかの意とは表向は解くことができようか」と疑問視して居られる。^(註12)このように諸見解が示されたが、諸研究に教示を受けつゝもこの条に關し申説をのべたい。

行平は三尺六寸の藤花を飾り良近は正客である。宴であるから他に人々参集して風流事が酒興をそえる。主人の弟

は当然この一座の人々と異った風の歌を詠んだわけである。こういった場の一座は形式的な、花を珍とし、季節を詠じた習の、又は酒宴のたのしさをよんだものであるにちがいない。「咲く花の」という歌で一座の人はそれがこの場を詠じたものとうけとったのである。「下にかくるゝ」とは何も姿を没しゆく^ゝと解釈したわけではない。80段の「わが門に」の歌に見られる如く、「かくるゝ」とは、お蔭を蒙る、庇護をうける、ととるべきではなからうか。尤も定家本では、「下にかくるる」であるが、谷森本、河波文庫旧蔵本、神宮文庫本、泉州本では「かげにかくるる」という本文である（塗籠本はこの段を欠く）。源氏物語花宴巻は一応後代の成立に当るわけであるが、弘徽殿方の藤花の宴に招かれた源氏が、諸人袍を著する中、桜の直衣の、あざれたる大君姿で入場する。藤花の盛の中、「おくれて咲く桜二木ぞ、いとおもしろき」に合致する風情である。そして夜更けて酔うた様で、寝殿の東の戸口に寄って「かしこけれど、この御前にこそは、陰にもかくさせ給はめ」という。これについて河原抄では「咲く花に」の歌を引き、花鳥余情でも「いま二条のおとゝを忠仁公になすらへてかげにこそかくれさせ給はめ、と源氏の君のの給へるも、藤のはなにかけたる詞なり」とのべる如く、この101段の影響かと思われるが、そうとすれば源語作者のこの段の解し方、ひいては勢語源氏を通じて、このような場合の「かくる」の語が一般にすぐうけ入れられた意味を語っているものであろう。さて、一座の人々は、こう解したのである。「一座の連中、はお庇護にあずかるべく、媚びへつらっている全く藤花に象徴される良近殿の勢は盛なものだ。」と。藤花は、なさけある、行平の、わざゝの趣向である。もつとうがっていえば兄弟合作のとんだ皮肉である。多少ともやましい心を持って宴に加わった者なら、すぐ抵抗を感じた筈であり、正客良近にも通ずると思えば甚だ失礼に当ると感ずる。その不快な感が、今までの歌の調子を破った異様なよみざまとしてひびき、「などかくしもよむ」と詰問に至ったものである。同族親友の盛事を賀することは異があるまい。又他族疎遠であつても、隆昌の微を見て、恵にあずからんとするのも障りはあるまい。障りが生ずるの

はそうした心裏にひそむものを突かれたからである。101段の歌は80段の歌を裏側からとりあげた、とでもいうような意味をもっている。勢語の作者は、一首の歌の意味のとり様からくる面白さをとり上げたと思う。人々が「そして」というのも、もとより87段などにおける和歌批評めいたものに連なるうが、単に歌のよみざま、よしあしにしては強い表現であろう。この物語は他段に見られぬほど、左兵衛督行平とか左中弁良近とか麗々しく書きたてている。それというのもこういう人間関係がこゝでは欠く事の出来ぬものであり、はっきりとした注視の下に一段は仕上げられているのである。この章段の作者は宮廷人事の全く不明の後代のために筆をとっているのではない。皇子やその縁者についての記憶が持ちつたえられる人々の中にあつて筆作され伝えられた筈である。良近は皇子の祖父であつた、これは良近の名をはっきり出すことである程度説明し切つてしまえる。行平とても同じ事である。行平もその女は清和女御で皇子の祖父となつた人である。両者の交会はないがしかの史実に拠っているとすれば勿論、おぼろげな伝から醸成された作為としても、良房や栄華の盛り、藤の花を出したこの一段は、微妙な兩人の背後を語らずにはおられぬであろう。それがあるじのはらからの歌によつて示されるのである。物語は良近、藤氏の榮を押し出して同じく皇子の出た在原氏は媚の座の中に置かれて了う。それは貞数が貞平より後年に誕生したから、という計算ではあるまい。藤氏に対して、衰調の在原氏という観点からとらえられたからである。行平を「なさけある人にて」というのも、藤花については、それが本来何の悪意から、卑屈な気持からも、飾られたものではない事を示す。歌をよませられた弟業平も、後の説明が言い通れというのではなく、一座の人の詰問する意味でよんだものではない、しかるにひどく意外な反響をよんだ。作者はこういう設定の下に、縦横に人々の空気をえがき出した。重点はむしろ「人を多み」にかゝっていると見られよう。業平は陳弁する、「いゝえ、私はたゞ太政大臣様の御隆盛を思うて良近様をお祝賀申し上げたのですよ」。彼にはするどく時流をつく氣骨のある姿などはない。松尾博士のごとく、むしろ媚と自嘲

の影響のみである。一座は安心して物語は終る。おちの歌物語的効果は十二分である。こういう構成は単なる和歌の詞書の延長などというものではない。相当知的な歌話構成の方法がうちたてられているわけだ。

こういった方法は同じく行平に関する114段芹河の段において見る事が出来るのである。冒頭に掲げた如く、後撰集に伝えるところでは「翁さび」の歌は行平の感懷をのべたもので、この歌を他者が何と見たかはわからない。しかし勢語では、昔ありける男が詠んだ歌を仁和の帝が見て不快と思うのである。——塗籠本には仁明の帝とあるが、年紀を業平に合わせんとしたためのものであらう——「おのが齡を思ひけれど、若からぬ人は聞きおひけりとや」と注しているが、行平はこの時六十八才、仁和帝は五十七才である。だから史実としての右の詠作の場においては、詠み手の氣持も、それを見聞いた老人の氣持も、ありえそうな事ではある。そして後撰集に伝えられるところでは、後に「行幸の又の日なん、致仕の表を奉りける。」とあって、^(註)これによれば、「翁さび」の詠唱は、深い感慨がこめられているものであるわけだ。実際にこの歌をめぐる評判もあった事であらう。しかるに114段では後撰の伝え方と異り、帝の不興を語っている。それは同じく歎老を伝えながら、誤解によって詠み手の立ち場がひどく悪いものになり、老い衰え行く姿に一段と不遇不運の趣をそえたものとなるのである。三尺六寸の藤花の歌といい、摺狩衣の袂の歌といい、共に歌についての悪評が云えられるものである。77、87、103、105段等に見られる記者の評言は、謙辞とも解されるが、右の聞き手よる悪評を記するものとは表現の形式は異ってもやはり同質のものがあつて、連続した筆者の態度や視点を見る事が出来る。101段には陳弁が加わっているが、114段では当人の口を用いず、筆者の評註として記されている。こういう説明によって又、歌よむ人物は、媚や慨歎という弱々しさを伴い、総体して卑小化されて把握されるのである。

101段についての問題は伝本中これを欠くものがある——塗籠本に欠けている——ところにもある。書写間の脱漏かというにそうは考えられぬ。この本は定家本にある章段中十一段、大島本にある章段中の十二段を欠く略本であるがそれら欠脱章段中には39段、「むかし西院の帝と申す帝おはしましけり……」にはじまる崇子の葬送、源至の登場といった段、77段「むかし田村の帝と申すみかどおはしましけり……」にはじまる、女御多賀幾子の法事、藤原常行の登場といった段を同時に欠いており、これら史実に取材したり、実在人名を出したりする章段を共に欠いているのであって、単なる脱写とは考えられない。又そうかといってこの本は、この種の章段をすべて欠く訳ではないのであるから単なる編集方針による削除ともとれぬ。他の九段を見ても一貫して削除したという理由もなさそうである。そうすればこれはやはり章段形成過程の問題であって、101段は固定度のある程度稀薄な章段といふべきもので、39、77段も同断である。ところが参考伊勢物語所引の為家本は、…101 80 81 A 114 という奇妙な配列をもっている。A段は大島本系にあって塗籠本に欠けている章段である。そして大島本系の諸本、大島本、神宮文庫本、泉州本、谷森本、阿波文庫旧蔵本などは…79 80 81 A 82 ……、塗籠本は、…79 80 81 114 82 ……という配列をもっているのと関係がありそうである。一体この為家本は中部において相当異様な配列を持っているが、片桐氏は三群に分けて考察し、業平自筆本、狩使本などの投影という事を論じられたが、三群に分けて見るのは妥当であろう。第一群は1(一)と42(元)、ほとんどの諸本配列と同じ、第二群は69(元)と63(次)で諸本と大いに異なる。第三群は47(次)と125(三)で割合に順序が整っている(一)内は為家本の配列によって初段から数えて示される章段番号)。前記の配列はこの第二群中にあるが、この第二群の特徴は、

69 102*
 (77)* 103
 107 87
 96 96
 (118) 82
 83 85
 84 86
 45 (46)*
 93 (94)*
 (67)* 43
 44 (101)*
 80 81 (A)*
 (114) 64
 (115) 65
 58 59
 78 79
 98 (95) (D)
 (117) 72
 (73) (116)
 (74) 75
 (111) (E)
 121 62 (B)
 (C) 88
 60 (37)
 (109) (B)

の如く、まず伝本により欠脱ある章段―(―)を以って示すが、あまりにも集中している事である。又定家本大島本に比し塗籠本に欠ける章段―(*印)―も、この中特に集中して存在する如くである。内容的に第二群は、第一、三群が、初冠より二条后への思慕、東下り、様々の恋といったように、二条后、東下りを主とする昔ありける男の恋物語、一代記といった、割合に整ったものであるのに対し、多様である。二条后、東下り、実在人名を出す段、遊宴の段、歎老の物語、君臣母子の情等々があり、殊に伊勢斎宮物語と、惟喬親王に関するもの、又実在人を出す諸段の存在に特徴がある。又比較的長大な、而も説話として特異な好篇も多い。63、66段の如きは、あるいは在中将と記して、恋の英雄像化した著名の業平の称を出したり、又二条后物語を大きな構成のもとにうち出したりしている。総じて第一、三群が、何時誰ともしれぬ多くの恋物語で、二条后、東下り物語から引きおこされているのに対し、第二群は、割合に実在人や業平の逸話などに根をもつて虚構された章段が多い。東下りや二条后をふまえた65段、又は業平を恋の英雄化している63段、なども、この中にある。又、94段子までなした仲で離別し、後に男ある女に、男より絵を頼みやつてうらみの歌を交わす物語など、古注釈に大和物語の染殿内侍や能有の出る159160段に合わせんとする説がある(註15)が、直ちに右大和物語兩段によって、同種人間関係による実話とは言えぬにしても、その様な説話と無関係でなさそうなところが、全くの空想による作為でなく、ある程度業平の逸話を頭に置いた作である、と考えられそうなものも加えられるかもしれぬ。ともかく内容的にも第二群は第一、三群と別して考えられよう。そして形式面から諸本欠脱の多い事実も全然別様に考えるべきではなからう。勢語の統一的物語としての魅力とか深さとかは、実はこの第二群に位置する諸章段の扱い方に左右されよう。それだけに伊勢物語構成の鍵とも見られ、形成過程を考察した場合、この群からとり出される内容形式の特質は、生長説と矛盾するものではなさそうである。現前の参考本為家本第二群そ

のものが、果してどの様な性質由来のものかは詳しくはわからぬが、この群を通して以上のように推量することができ。引き続き考うべき事は多いが、別稿を要する。さてこの様な概観を経て前掲の配列にもどう。

塗籠本 80 81¹¹⁴、大島本系 80 81 A、の両配列は為家本 80 81 A¹¹⁴と合流した様な形で見る事が出来る。81 段の次にこの様に異なる章段が配置される訳は何であろうか。A 段と 114 段との間には関係を見出す事は出来ない。むしろ諸本ともこの後につゞく 82 段以降の惟喬親王諸段に対して一応別群としての区切のつく個所であると見られるであろう。A 段は大島本系諸本のみ存するものであるが、今大島本で示せば、

雨のいみじうふりくらし、つとめてもなをいみじうふるに、ある人のがりやりし、

ふりくらし／＼つるあめの音をつれなき人の心ともがな

返し、

やゝもすれは風にしがたふあめの音をたえぬ心にかけずもあらなん

であり、諸本大差ない。これは他章段と異って、勢語に特徴的な、昔とか、昔男ありけりとかいった冒頭を持たぬ書き入れ風のものである。現に大島本では前段 81 段の末尾に、行をかえずにつゞけられ、而も 81 段の塩釜の歌の次は、この本では「とよみけるは」の文を欠いているので、「陸奥国に行きたりけるに」以下 A 段末尾まで一まとまりの様な形になっている。この挿入は何に由来しようか。思うに 80 段雨中に藤花を奉るの物語、「ぬれつゝそしひて折りつる」の歌をもつ章段から引き起されたものではあるまいか。そして 80 段は、歌の次に「これもおなじみぎのおとどとぞ」(谷森本、阿波文庫旧蔵本、神宮文庫本)「これもしらかはのをととそうちの本ニハあるかものはかのほとりに」(大島本)などがある。大島本の、「うちの本云々」以下は次の 71 段の註記であると見られ、それが本文の様に記されたものであろう。大島本にはこの様な、ある章段の前にその註記を記す形式が他にも目につく。そうすると、右

の前半も81段に対する註記が本文の様に80段末尾につけられたものか、というにそうも考えられず検討を要する。右大臣とは誰か、白河大臣とは誰をさすか、という事になるが、81段河原左大臣と同じ様な時代、貞観の頃と見るのが至当だから、右大臣であれば基経という事になる。「これも」という表現はある章段を前提にしているが、それに当るものは97段である。この段は堀河大臣基経に関し、

むかし堀河のおほいまうち君と申すいまそかりけり。四十賀九条の家にてせられる日、中将なりける翁、

桜花ちりかひくもれ老らくの来むといふなる道まがふがに

とあるが、この歌は古今集に「堀河のおほいまうち君の四十賀九条の家にてしけしける時によめる」と詞書した業平の歌である。そして更に諸本いずれも次に98段、

むかしおほきおほいまうち君ときこゆるおはしけり。仕うまつる男、なが月ばかりに、梅のつくり枝に雉をつけて奉るとて、

我がたのむ君がためにと折る花は時しもわかぬものにぞありける

とよみて奉りたりければ、いとかしこくをかしがり給ひて、使に禄賜へりけり。

があるが、この段については、古今雜上に題しらず読入しらずとして初句「限りなき」とある類歌があり、「ある人のいはく、この歌はさきのおほいまうちぎみのなり」と左註があつて、これによれば良房の歌という伝えがあるという事である。97段の歌は明らかに業平が基経の賀に詠んだ歌であるのに比し、これはそういった確証が薄い。それのみならず、出典を穿鑿するところまで行かず物語として読んだ場合、どうしても98は97の連続であり、やはり基経の事として解釈され易いのである。97、98段の、男が藤氏に歌を奉り、「我がたのむ」とうたい上げるのは、80段の、衰えた家の男が藤花を贈り―勿論藤氏へである―不遇をかこつ底の物語と同趣であり、さればこそ「これもおなじ右

のおとゞとぞ」の註記的文章の意味が了解される。又大島本にいう「しらかはのおとゞ」とは良房のことであり、これであれば98段より、同じく良房の事として注したわけであって、同様に「これもしらかはのおとゞ」の意味も理解できる。こういった註記は平安期のものといふべく、80段の古い解釈から、更に成立の問題にも関わるであろう。

猶大島本の「しらかはの大臣云々」には注意参考とするものがある。それは古註というべきもの、たとえば慈鎮為家両筆本朱注によれば、80段の「昔おとろへたる家」に註して、「有常カ白川家也」としてゐる。古註では80段は有常が中将に藤花をおくる、という事になっている様で、この点大島本系80段末尾の文は後の註記としても、古註などとは別系統のもの、もっと古いものであるにちがいないし、古註の「白川ノ家」とは、実は大島本にある「しらかはのおとゞ」あたりから派生転化して出たものらしい、と見当がつくのである。又大島本では81段は「むかし左のおほひまうちきみ九条のさとに」とあって、諸本文の六条が九条となっているが、これは前の「しらかは云々」の註記を81段のものと見て、それから98段へ、すんで97段基経九条の家にての賀の物語の家も、81段の邸宅も同一人の家と見ての変改の結果なのかもしれない。このように大島本系の本には、80段が97、98段と連関するものとの理解から相つながら註記めいた記述をもち、更に81段も内容的に関連するものであるから、註記的文章も両段の中間をうめつゝ、むしろ81段に連なる如く解釈されんとする傾向すら生じたい、などという事がわかる。だからこそ、80 81 A : という連続はこわされずこの前後に関連のありそうな物語を連ねて、似たような配列が諸本にも伝わっているのだ、そういった源流をたずねると、当然この種章段の成立過程に及ぶと考えられる。

57段は今、80段の註記文に関してのべたところであるが、この章段の歌「桜花ちりかひくもれ」は古今に出て多く業平の作と見えるものであるが、実は元永本・清輔本・筋切などには、在原行平となつてゐる。そして本文も元永本では「さくら花ちりかひまかへおいらくのこむといふなるみちまどふかに」と定家本と異り、而もこの本文は塗籠

本80段の歌の本文と同一なのである。又清輔本は行平の作とするが本文は第二句は定家本と同じであるから、歌の本文の合致は元永本塗籠本間にのみある訳である。大島本系97段の歌は五句「まよふへく」(大本)又は「まとふへく」(谷本等)であつて、半ばはこれに近い。平安後期の流布本と考えられる元永本系統の本文が、同様に平安後末期流布したと見られる塗籠本や大島本系のものに近似するのはごく自然である。定家本については古今勢語とも、歌に關しては実に整つており、勢語での特色ある変改をのぞいてはほとんど同一本文である。右の歌の本文の場合も、古今元永本勢語塗籠本の一系と古今勢語の定家本一系とが対立的に整理され、中間的に勢語大島本、古今清輔本の一系が設定されるのである。

元永本と定家本とが歌の作者を異にする例は、例えば勢語にはとられておらぬが、二三九歌は元永本で業平作となつて居り、他本定家本などでは敏行の作と見えているなどがある。たゞ三四九歌は元永本だけでなく他の系統上主要伝本がやはり行平作と伝へている点、平安後期は、この歌の作者は行平という伝が支配的であつた事は間違いない。では97段の作者は、その歌を行平、業平いずれの作と思つて物語をつくりなしたのであろうか。それは明らかでない。たゞ三四九歌は行平の歌であるのが一般的であつた時の人々は、勢語を読み解き研究するに當つて、行平の歌物語をとり入れたと信じた事はたしかである。大島本系諸本は、80段を、97、98段と同列であるとの註を持ち伝えている。さすればこれは行平を材とした物語が80段へ、更にその周辺へ發展潤色が及んでゐると見た事実を示していると思える。伝為氏筆本では97段は行平の歌であると註記して、気づいた跡を示している。伝為氏筆本の大島本及び皇太后越後本では114段に關し、不審の註が書入れられているが、行平の歌によつて一段を構え、物語の主人公が行平と見られる事への異論ではない。専ら芹河行幸が業平歿後の事であるのに対して異を註したものである。97段には貞観十七年と註して、業平在世時の事であれば、一段主人公の歌を、他者たる名の明らかな行平のものをもつて来ても、その

点には不審を抱いていない。そのような疑問は伝えられていないのである。これは勢語は業平の自記又はそれをもとゝしたという意味の業平物語としての観点に立っているからであらう。塗籠本では114段を、81段の次に位置せしめているが、冒頭は「昔深草の帝」として右の不審矛盾からは一応のがれている。その位置から見れば、79段は行平家皇子誕生物語で、その旨の註記を諸本とももち、80段は行平の藤氏への追従をふまえた物語であり、81段は行平と交際あった融の邸で、一族中に親王をもった在原氏の、東流浪浪の経験ある男が、親王の集会の端に姿を現して歌よむのであり、114段は行平事実に拠った物語であるという事になる。114段は諸本その位置多様である。定家本の様に第一四段という位置もあれば、大島本のように終焉段の手前という末尾に位置せしめたものもあり、又右の塗籠本の様な位置もある。大島本や皇太后宮越後本によれば、この段を欠いた本もあったのである。そして皇太后宮越後本に存在した事は断片で知られるが、その抜出断片に関係ある配列を巻末にもつ泉州本や谷森本なども、越後本のまゝの……115 B C 114 D ……という配置を溶融させた内部にもつのである。諸伝本は処々差異があつても、初冠本として大体の章段配列は一致しているが、その中でこの様に欠存し位置の定まらぬ114段はどの位置が本来のものであらうか。定家本における114段も末部、諸本欠脱ある章段の多い群中に位置するのである。つまりとこゝろ114段は成立以来伝本間に位置不定なのであつて、定位して、何か一連の関連群の中に座を占めるとすれば、塗籠本の様な姿でなくてはならぬのである。この本の本文や位置が合理的だといつて、これが本来のものだとする証は何もない。仁和は仁明の誤りで、つまり深草が本来の作為と見るというのも、芹河行幸という史実を顧わす以上当るまい。114段は行平に材をとつた章段構成が実は業平物語として考えられる様な、業平の年紀を超越して、しかも昔ありける男というこの物語本来の姿をとっている事を示す。とすれば114段の作為者の脳中には實在人の業平の物語をはるかこえた、ひどい矛盾を十分承知の上での創作の志向があつたのである。もし97段が、平安後期にそうであつた様に、行平の歌より構成されたとしたなら、114段

はこれを踏襲しつゝ飛躍をとげたものである。そしてこれらは行平の歌物語を勢語形成に導入したのである。逆に97段が業平の歌と意識しつゝ構成されたとしたならば、後に行平の歌と改め記憶されて行くほど、古今や勢語に醸成される行平的要素の力が強く発動したのだという事になろう。その場合114段の成立もその過程中に考えるのが至当の様である。

七

97段や114段など、行平に関わりある章段で共通して打ち出されているのは歎老的気分である。勢語章段中主人公の男を翁と称する章段は77段、79段、81段、83段、97段である。79段は氏の中に親王誕生の段、81段はさきに考察した如く融邸の物語、それに79段とそれとの意味において行平に関わり又はその投影がある。114段は塗籠本では「なま翁の」とある他、多くの本では翁の称はないが、「今はさること似げなく思ひけれど」と翁を示し、歌に「翁さび」とあり「おのがよはひを思ひけれど」と述べられている。この様に翁と称する段が行平に関わる物語である事が多い。又87段の、「男のこのかみ」と称して行平を暗示する衛府督の歌は、既述の如く古今に出るものありながら改作めいて、「我が世をばけふかあすかと待つかひの涙の滝といづれ高けむ」とあるものであるが、この歌は二様に解ける。一義によれば我が世は我が命である。他義によれば我が運勢である。近世の代表的諸註は前者によって註しているが、その場合、やはり歎老の部に入る。五十六才で歿した業平と異り、七十余まで生き、かつ長く官務についた行平は、老者として印象づけられるにふさわしく、やはり伝えられる数少い歌の中、翁さびの歌などによってその趣をこくした事であろう。人の一生を叙するとすれば、当然老齡期の歌物語もなくては叶うまい。勢語は行平を加える事によってそれを巧んだと言える。

しかしながら歎老とは、老が物悲しく訴えられるというのは、その身の境遇に重り合っているからである。「我が世をば」の歌に二義あると言ったが、これは歎老をそれ／＼別の面より見たものにすぎない。快活や意力とは反対の気分である。それは87段が津の国物語であり、この段及びこれにつらなる歌物語に行平業平の、京はなれたわびしい流浪の伝承がこめられていると見た面からも併せ考えることができよう。又97段を見よう。これは基経四十賀が貞観十七年であるから業平にして五十一、行平にして五十六である。物語で翁としてあるのはいづれにせよ事実には叶う。そしてその歌「桜花ちりかひくもれ」は賀歌としては、多くある様な、鶴亀とか、千歳をいわうとか、万世まで、とかいう表現と異り、「老いらくの来むといふなる道」という言葉を出しており、しのびよる老の意をひめている。そして物語ではよみ手の翁と相俟って、むしろしんみりとした老境の迫る気分をたゞよわせているのは、やはり自らの境遇をこめた、歎老的なものに連なるものと解釈される。更にこの段に含められる貴顕に参上しての追従、媚の要素は、98段という同趣にして主人公を漢化して男とした段、80段という更に漢化した段へと、次第に深められているのを見うる。つまり以上において見たところ、行平的なものの歎老は、その身の境遇からくる歎声と交錯しているのである。現存諸本は大体76段あたりより実在人を出し、史実に則り、又は暗示した様な物語がつゞぎ、79、80、81段と行平的なものによつてせり出される様な諸段があり、塗籠本では114段を加え、つゞいて82段以降惟喬親王、業平と母、宮仕えの物語を経て、87段布引の滝の段に至り、88段月をもめでじと老を歎く、業平の歌に拠った一段へと連る。これらはたしかに惟喬親王物語の一群をおしつゝんで、ある意図による配列と思われるが、77段多賀幾子法事、78段同行事につゞきに、隠棲者たる山科禪師親王の事、84段業平とその母の歌によつて親子の情を見せる、「老いぬればさらぬ別れの」という唱和の物語などをふくんでいる。山科禪師親王は仁明皇子人康親王と説くものが多いが、史実として右法事にあわぬ故、土肥経平の如く、皇太子を廃された失意の人業平の叔父高岳親王とする説^(註15)がある。総じてこ

れら一群、業平の親王族類縁にまつわる彼の周辺の物語と見られるが、以上を掩うものはむしろわびしいしみじみとした情である。主人公も翁として登場するにふさわしい。83段では、惟喬諸段中親王と、花を賞し月をめて歌よんで親しみ合ふ男が82段で、「馬頭なりける人」などあるのに対して「翁」の称で出るのであるが、この人物はこのように親王に親しく仕うまつていたところ、思いの外の御出家にあり、小野にまうでて、「忘れては夢かとぞ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは」と悲泣するのである。翁の称はこの段の哀愁によく適合するといえる。85段は83段の類似段で漢化したもの、昔男ありけりとあつて、86段は更に83、85段から宮仕えという主題を揺曳させたものであり、87段に至るのである。82、83、84段等の主軸は、古今集にその詞書と共に業平の惟喬扈從の歌、その母との歌、など出るものであるから、勿論現在の形には何がしかの附加作為は顯著であるが、勢語章段としての構成は古からう。このような諸段と結合し、同じ様な気分を支えられているのが行平的な要素の見とれる諸段である。業平の縁辺をふまえ語る歌物語は自ら、彼及び、諸縁者一族の境遇と哀感を深め醇化して伝えるものであり、その色潤をおびた創作が加えられて行ったのである。行平的なもの、歎老は所詮その根をこれらに下しているものであつて、97段から98段、更に80段周辺から101段へとあらわれてくる藤氏への追従や媚態も、在原氏の生活と感情をえぐつて行ったものであり、101段はその極北に位置するといつてよい。

101段では、他段と異り、「左兵衛督なりける在原行平といふ人ありけり」とはっきり行平を提示する。勿論歌物語の主人公は「あるじのはらからなる男」である。しかし既述の如く、行平を提示し、良近をあげ、良房を云々するのはさして意味がないというものではない。歌物語の主眼は、行平を代表とする在原氏と藤氏との間の微妙な空気を、行平の弟業平を登場させる事で語ろうとしている。行平の名は、こゝでは暗示する程度では用をなさなくなっている。114段が、行平の歌や事実を行平の名を出さず、ほとんど生のまゝとりあげて一段をなすのと一見対照的ではある。97段

では中将なりける翁と称したが14段では中将とも馬頭とも左兵衛督とも、中納言とも言わぬ。勢語中の一段故に實際のよみ手をおし隠して、諸章段と一連のものへと意圖したのは明らかである。それだけにこの段も行平の負うているものを押し出す事によって歎老不遇の世界へとの構成があつた訳であり、作者の志向には同じものが流れているといえるであろう。そして更に行平の名を出し、行平の歌というもののみ伝える1段、

むかし在原行平といふ人みまそかりけり。女のもとに

おもひつゝをればすべなしむばたまのよるになりなばわれこそ行かめ

女

こぬ人を今もやくるとまぢしさの名残に今日もねられざりけり

の如き極端なものが、断片として一部に存在するのはその余波というべきか。かゝるものは当然勢語の本のすべてに定着を見るには至らない。

ところでこの1段でも、又101、114段でも、又関連してとりあげた59、67段でも、諸本間の欠存多様であり、位置不定である。又古今に出る業平の老を歎じた歌をもつ88段すら、あの一見整理された如き塗籠本では、他本と異り末尾近く119、120段間に位置するのである。そうして左表に示される、本稿の考察対象とした諸段の欠存位置に関し、塗籠本は定家本や、又は大島本に対しても、最も対蹠的な存在である。殊に前にも一部見た通り、他の諸内容と併せ考えて101段を欠くこと、或いは39、77段を有しないことも加えて、102、103段はその位置も他本と異りつゝ、両段相並んで位置して居り、かつ103段の「さる歌のきたなげさよ」という謙辞を欠いていることなどは、やはりある程度この種章段や部分の形成の一断層を示しているのである。同時にこの本の性質について、伝流者についての考察の端緒を見うる

て寛平五年七十六才説をよしと見る説に一応従う。

(註4) 拙稿「伊勢物語生成考」国語と国文学第二十六卷三号

(註5) 池田亀鑑博士「伝藤原藤房筆別本伊勢物語の本文について」中古国文学叢考第三分冊

(註6) 拙稿「勢語小式部内侍本考」国語と国文学第三十五卷第五号

(註7) 池田亀鑑博士「伊勢物語に就きての研究研究篇」に典拠についての基本的な考察があるが、直接関係を認めうる勢語古今の場合に対して後撰勢語の場合は異った説明でなくてはならぬとし、1. 後撰↓勢語、2. 勢語↓後撰、3. 間接関係、4. 二種の勢語を想定し後撰と二重に関係づける、という四つの場合を想像して考察しているが、積極的な結論は出ていない。

(註8) 右書六一八頁

(註9) 卷十一恋歌は天福本後撰集に行平とあるが、流布印本に業平と伝えたものであった。行平の歌として伝えられるものは他に新古今卷十七の歌―これは前述の如く勢語がもとになっている「こきちらす」の歌であるから特記されぬ。――「続古今卷十」「津の国すまといふ所に待りける時よみ待りける」と詞書して「旅人の袂すゞしくなりにけり関吹きこゆるすまのうら風」と源氏須磨巻に引かれた歌、玉葉卷八旅に、「題しらず」として、「幾度か同じね覚に慣れぬら苦屋にかゝる須磨のうら浪」と見えるが、共に須磨の詠である。

(註10) 鎌田正憲は新釈の説を是とし、「此の歌をよみてやりけり」とするのは和泉国行きの68段の「皆人／＼よまずなりにけり」と同じ筆法と指摘している。68段は66段と同様な一連であり、56段と78段との関連を考える上にもあるいは参考となるといふべきか。

(註11) 松尾博士は現実としては期待をうらぎってむなしく凋れてしまった貞教親王(薨年延喜十六年又は十三年とも)が、古今撰進後十一年であり、勢語の成立を古今以後あまり隔たらずしての事と見て、「恐らく在原氏に関係あったと思はれる勢語作者は、この「わが門に干ひろあるかげを」のことはぎが空しく砕けて、在原氏の没落を身に一人しみ感じる位置にあり立つてゐたと想像することができよう。」と述べて居られる。(「伊勢物語の虚構について」学習院大学研究年報二) たゞ博士は「これは」以下の後文を後人の注と見て考察から外して居られるが、卑見では成立の最初から存しない本文であるが註として古いものと見、勢語本文生長であると考え、そこに示される成立につながる古い解釈と作為の発展を考える。

(註12) 右松尾博士の論文

(註13) 今井源衛氏「伊勢物語」日本文学協会日本文学講座日本の小説I

(註14) 片桐洋一氏「伊勢物語の成長と構造」国語国文第二十七卷十二号

(註15) 勢語臆断に「此女は右大臣良相公女染殿内侍とて滋春が母なれば子ある中といへり。後の男は大和物語に見えたり。近院大臣能有文徳天皇の御子なり。」とあり、古意も「此説よくあたれり。然れども比条の歌は業平のよめりとも聞えず。記者のならん。よりて思ふにさる面かげ有る事も端の詞は作りて、さて歌は記者のよみて一条とせしなるべし」とのべている。

(註16) 春湊浪話の説であるが、近くこの准拠をとりあげたものに永井義憲氏「伊勢物語と真如親王」―日本仏教文学研究―がある。尤も氏は真如親王説に傾きつゝ結論としては資料出現まで断定に慎重でありたいとのべられる。